

## 「北朝鮮に対処する韓国の実態 -TIF 訪韓団に参加して（報告）」

拓殖大学名誉教授 茅原郁生

拓殖国際フォーラム（TIF）で進められた韓国訪問団（11月9-12日）の1員として参加した。韓国では戦争記念館や統一展望台などの現地研修の外に世宗研究所、在ソウルの韓日両国の言論人などと有意義な意見交換を重ねることが出来た。

訪韓の前に米トランプ大統領のアジア歴訪があり、高まる北朝鮮の核・ミサイル脅威への対応が喫緊の課題となっている折から、これらを踏まえた感想などを報告したい。

### 1. 韓国への関心事と現地研修の感想

訪韓に当たり筆者の関心事は①韓国内での北朝鮮(北)の脅威の受け止められ方、②トランプ大統領訪韓と米韓同盟への信頼性、③文在寅(文)大統領の統治の実態と国民支持の実情などにあった。まず関心事に沿って北対処上で連携を強めるべき韓国について見聞した感想をまとめておこう。

第1に韓国内で感じ取られる北朝鮮の脅威や緊張感であるが、筆者にとって10年ぶりのソウルは高層ビルが林立し、清潔な街並み、道行く人の明るいファッションなど想像を超えて社会全体が落ち着いた雰囲気であった。近年の北朝鮮の核実験やミサイル実験などに対する脅威や危機感は余り感じられなかった。

それはソウル市内に限らず統一展望台からイムジン河を隔て2キロ先の眼下、北朝鮮領内の農村風景もまた農作業をする人の影など長閑なものであった。メディアが伝える国際政治の中では北朝鮮の脅威が差し迫り、シリアの事例のように米国から懲罰的なトマホークなどの先制武力攻撃が何時でもあり得るとの緊張が走る中で、イムジン河を挟んだソウルと北朝鮮での平穏な風景は何だと意外感を抱かされた。

この雰囲気には、先の世界大戦で日本がポツダム宣言受諾後に朝鮮半島の南北から米軍とソ連軍が同時に侵入し、北緯38度線を境に韓国・北朝鮮を独立させた事実に起因するものがあるのではないか。朝鮮戦争はあったものの、本来は同一民族であり、奇妙な同族意識と兄弟国などの深層心理から相互に攻撃はないとの信じ込んでいるのでは、と思いついた。

第2に米韓首脳会談の韓国の受け止め方で、米韓同盟は強化されるかの問題意識である。今日北朝鮮の核・ミサイル脅威ともに武力紛争突入への危機が高ることになる。しかし李大統領の政治信条と対応は、対北圧力に当面は同意したものの、なお宥和政策は捨てて

おらず、また「インド太平洋戦略」にも同意してはいない。

この様は対応の背景には、文大統領の政治的な立ち位置に加えて、韓国にある屈折した事情があることを現地で聞かされた。トランプ来訪に先立つ李大統領の訪米では国賓歓迎として儀仗隊の栄誉礼さえ省かれていた。また今次トランプ訪韓では李大統領がわざわざ米空軍基地まで出迎えに行ったなどの現実があった。この様な文政権の対応に、韓国の保守系言論人からは米韓同盟の崩壊の危機の声まで聞かされた。

それでも世宗研究院訪問時の夕食会で、同院に派遣された米国人研究者との私話として、米国の親族からは北朝鮮侵攻の危険性から早く帰国するよう求められているが、心配ないと説得するのが大変だったとの逸話から米国人の受ける危機感の温度差が興味深かった。また米韓同盟の関しても、韓国の地政学的な価値から米国は韓国の安全確保が国益につながり、同盟の価値は依然高く心配は不要だとのことであった。その上で朝鮮戦争前に出されたアチソン声明(半島を米防衛ラインの外とする)の時代とは違うとの見方に接して安堵感を抱いたものであった。

第3に前政権の失策はあったとしても左派の文在寅氏が大統領に当選したのは何故か。前朴大統領のオウンゴールに加えて最低賃金や正規雇用化などの政策が打ち出され、左派がファッション化する韓国政治のムードが勝因だとの識者の見方が興味深かった。また就任後半年を経ても文大統領は驚異的70%の支持を集めているのは燭デモなどポピュリズム的運動が文政権を支えているとの指摘に、慰安婦問題なども同根で日韓関係への影響に一抹の不安を感じた。

同時に北朝鮮の脅威への対処で重要性を増す日米間三国の準同盟化の模索もムードに流されないか、これに対して「保守系には言論の自由がない」との韓国言論人の述懐に危機感を覚えたものである。また前朴政権への報復的な反撃に象徴される大衆迎合的な政治・社会の風土に違和感を感じた次第でもあった。

第4に、その外の訪韓時の印象として2つ。1つは戦争記念館訪問で、その入り口に「韓国を救う戦いで倒れた兵士への謝辞」が銅板に掲げられ、正面の壁に全犠牲兵士の名前が刻印されていたことへの感銘である。多く子供達が団体で見学しており、国土を蹂躪された民族の国家観に接して歴史問題とは別の韓国の側面を見た思いであった。

その一角の執務室で白善燁將軍を表敬したが、97才のご高齢ながらなお矍鑠として祖国を思う熱いお気持ちに感動した。白將軍は朝鮮戦争時に北から追い込まれた釜山橋頭堡で第1師団長として最後まで堅守された祖国の英雄であり、今日も大事に遇されている実態に韓国の健全な側面を見ることが出来た。

2つは日本大使館前のいわゆる慰安婦像(韓国では平和を願う少女像)を見てきた感想である。像の側の簡易テントには学生が泊まり込んで管理?していたが、この問題の実態が若い世代にどう理解されているのか、これも現代のファッションの1つとのことであったが・・・。

## 2. 韓国から見たトランプ・アジア歴訪

訪韓時期は、トランプ米大統領は中国訪問と近い時期であったが、韓国現地で感じられた歴訪成果についても感じる所があった。

TIFの訪韓に先立つ10月にトランプ大統領は日、韓、中国に続いてベトナムで開催されるAPEC首脳会談などに参加するアジア歴訪をした。その初歴訪では対北圧力と貿易収支の改善が大きな狙いであったが、それはトランプ流の取引外交そのものでもあった。

トランプ歴訪の成果は、最初の訪問国日本では対北圧力強化はじめ全般に亘る合意形成が信頼感の上にてできた。韓国では文大統領との首脳会談と国会での講演があった。首脳会談では、文大統領は対北融和を求める対話の主張を抑えて、北朝鮮への圧力強化に同意はしたものの「トランプ大統領に軍事行動の意図なし」と洩らすなど、対話重視への拘りは捨てていなかった。トランプ大統領の姿勢は、共同記者会見後に文大統領から手を差し出されながら握手もしないで退場して場面が象徴していた。

他方、韓国国会ではトランプ大統領は熱のこもった対北警戒や警告を表明しており、米国の対韓姿勢にはアメとムチを思わせるものがあった。韓国側言論人がトランプ歴訪の目的を「日米では「協力」を、米韓では「教育」を、米中では「要求」を」と例えたが、この端的なキーワードの意味が分かった気がしたものである。

しかし差し迫る北朝鮮への対応に当たって日米韓三国の連携強化の必要性は高まっており、このためには日韓間の喉に刺さった棘ともいべき歴史問題の解決が先決と米側から期待されていた。しかしトランプ歓迎宴には元慰安婦が招かれ、独島(竹島)エビ料理が出されたのは何を意味するのか。この様な対応は、これまで日韓両国の歴代為政者が積み上げてきた歴史問題克服の努力を無にするものであり、この様な韓国の対応に会談後の米紙は「文大統領は信頼できない」と報じた程である

中国では、一般観光客を遮断して広大な故宮紫禁城を習近平主席夫妻がトランプ夫妻だけのために案内するという大仰な「国賓級プラスα(崔天凱駐米大使)」の厚遇をした。加えて38兆円規模の商談潰けでトランプ訪中で、北対処や貿易赤字問題での鋭い突っ込みや要求は出されないまま、実のない儀礼的首脳会談に終わった感がある。のみならず最後の共同記者会見で習主席は「太平洋は広く、中

国と米国両国を十分収容できる」との持論を改めて強調すると共にトランプ大統領が北への圧力強化を主張したのに対しても習主席はなお対話による解決の重要性を強調するなど、米中首脳会談での不一致も露呈していた。

トランプ大統領は歴訪成果を帰国途次の機中で「考えられない程の成果」と自賛したが、歴訪を受け入れた各国の成果への思惑は様々であった。メディアが「期待外れの米中首脳会談」、「批判続出の米韓首脳会談」などと評価していたように、必ずしも期待が満たされたわけではない。その背景には米中間のアジア太平洋地域でのパワーシフトの進行や対北朝鮮戦略での温度差があった。さらに「米国ファースト」の主張と市場経済やグローバル化の強調など米中両国のかつての主張が逆転するような複雑な変化の影響が投影された面もあった。

### 3. その後の北朝鮮との角逐と「3不」を巡る問題

北朝鮮の核・ミサイル危機に対しては、これまで国連決議に基づく制裁が進められているが、その規模などを巡って米国と中韓両国との対立が続いている。米国は共同演習を名目に日本海に異例の空母3隻を展開して演習を続けて北朝鮮を牽制していた。そのような中で中国は北朝鮮に特使・党中央対外連絡部長(閣僚級)を派遣するなど米側の求めに応じる対北説得の努力をしてきたが、不発に終わっている。これらを受けてトランプ大統領は9年ぶりに北を「テロ支援国家」に再指定した。

この一連の対北圧力に対する回答として、北朝鮮は11月29日に2カ月半の「沈黙」を破ってミサイル発射実験を強行した。今次ミサイル実験はロフテッド軌道で4500kmまで上昇し、秋田沖のわが排他的経済水域に着弾したもので、飛翔距離は1万3000kmと推定されている。射距離的にはゆうに米本土に届くと推定され、大陸間弾道弾(ICBM)と見られ、緊張事態が再発している。

この様な脅威の高まりに対して、国連の制裁に加えて日米間三国の連携強化の必要性が高まっている。既に米韓間では韓国内に高高度ミサイル迎撃装置(THAAD)が配備され、その強化策や日本での地上型イージスシステム導入が検討されている。しかし周知のように中国は韓国内のサード配備への反対を執拗に反復し、韓国バッシングを進めてきた。

しかしトランプ訪韓に先立って、文大統領は習主席との電話首脳会談で「3不(米軍によるサード配備の強化に反対、米主導のミサイル防衛網構築には参加しない、日米韓軍事連携にも参加しない)」を約束したと中国側が洩らしてきた。

これは看過出来ない問題で、現代の北東アジアの安全保障環境に

大きな影響を及ぼすものとして今次 TIF 訪韓時でも話題となったが、韓国側からはテーマには上ったが約束はしてないと否定的な見方が示された。

このサードに関わる問題は、まさに韓国が米中 2 大国間で股裂き状態にある事例である。折から韓国の文大統領が 12 月 13 日初訪中する事が報じられている。習主席との首脳会談を控え中国は、韓国への団体旅行を 9 ヶ月ぶりに解禁するなど、このところの韓国バッシングを弱めてきた。中国の韓国への姿勢変化は、文大統領の対北宥和政策の利用と共に米韓連携の絆に楔を入れようとする中国の対抗措置と見ることが出来る。

その背景には、米国から中国の北朝鮮（北）への制裁圧力が不十分と見られ、中国の金融機関の対北取引をも制裁措置の対象になるのを回避する策とも言えよう。その分だけ 13 日からの中韓首脳会談の内容が注目される。揺れ動く韓国の振り子が再び中国側に引き寄せられることのないよう祈るばかりである。

見てきたように北朝鮮に対する国連の制裁圧力が進展しない中で、日米韓の連携はますます重要になっている。これは従来のアジアの安定が、米国をバブとし日韓比など各国とにスポークス型の 2 国間同盟で維持されてきたものが、日米韓三国の連携に広がる地域を跨ぐ多国間同盟に強化される試金石としても重要である。韓国が地政学的な自国の役割と国際的な責任を自覚して、米中間を上手く泳ぎわたるのではなく、腰を据えた毅然とした対応をするよう、期待しながら韓国訪問の報告を閉じたい。(2017.12.11)

了